

守屋 正先生を悼む

杉 立 義 一

冷雨降りしきる十二月十一日、大徳寺孤篷庵の門前で守屋正先生の永遠の旅立ちをお見送りして、お宅の前を通過して帰路についたが、数々の先生の思い出が浮んで、その夜は眠れず、いまさらながら心の空虚さを憶えるばかりである。

『日本医史学雑誌』三三巻四号(昭和六十二年十月)に、先生は「医史学と私」と題する一文を草しておられるが、多分に謙遜の文章である。私は二十年間、先生の側近にあって指示やお叱りや教訓をうけてきた。ここに私の凡眼に映った先生の人間像を記して追悼の辞としたい。



守屋 正 名 誉 会 員

先生は非常に先見性のある方で、はるか先まで洞察してそれに応じた対策をたて、決断をもって実行に移された。我々の対応が遅いとよく叱言が飛んだ。同僚のA氏は入浴中に先生から電話がかかり、タオル一枚で電話口に出たら一時間近くとうとうと抱負を述べられて遂に体調をこわしたという逸話がある。悪いことではあったが、私は終には対応の要領を心得てうまく切り上げるコツを悟った。きびしい反面、温情あふれる慈父の一面があり、苦心して集められた医学資料も我々京都の会員に適当に持たせて下さった。

先生は医史学研究者としては晩学の方である。しかしその基礎、背景をなす美術史、宗教、哲学に関する識見は長い年月の間に培われた。先生は岡山

の生れ、御尊父は岡山市長もつとめ、大原総一郎家とはご親戚であった。六高を経て昭和十年京大卒業後、内科学、病理学教室で研究中応召となり、前後六年半にわたり中国、フィリッピンで従軍され、先生の属する部隊の生存率二・五％という激戦の中で生死の間を体験された。この事は先生の思想、医の倫理感また医史学研究の上に大きな影をおとすこととなった。

例えば先生の美術に関する鑑識眼は素人の域を脱していた。戦後、中国絵画の蒐集に精力を出された。特に楊州八怪等の中国文人画のコレクションは世界的評価を得ていたので、欧米の学者も京都にきて守屋コレクションを見なければ物が言えないという有様であった。私も何度か拝見したが、それらはすべて晩年にさる美術館に寄贈されたと聞く。その研究が幸して『京都の医学史』では安土桃山篇のうち、キリスト教伝来と南蛮流医学の執筆となり、キリスト教精神が曲直瀨門下の啓迪院医則に強い影響を与えているとの先生の見解となり、「医は愛なり」との信念を、第八三回本会総会の会長講演の中で力説された。

私の手許にはいま先生からいただいた七十通ばかりの書翰が残っている。そのうち私に対する絶筆となった昭和六十二年十二月二十二日付の手紙の一部を紹介させていただく。これは前日に友人の告別式に行かれ、途中で狭心発作をおこされた夜にお書きになったものである。

今日は年末御挨拶としては結局苦言になると思いますが、先輩の忠告をお受取り下さい。

今後言うものもないでしょうから、——中略——『日本医史学雑誌』から依頼の「医史学と私」へは一三枚書いて、如何に私がヘンテコなインスタントなインチキ医史学者であるかを詳さに書きました。昭和五十年の「京都の医学史展」、山脇東洋観臓碑、『京都の医学史』、第八三回日本医史学会総会と矢つぎ早のヘンテコ医史学者のフェルラウフを書きました。これで私の医史学編歴の旅も終りです。——中略——

私は哲学、宗教の欠除した学問（医史学を含めて）は全く無力のものと思つて居ります。阿知波史学の立派なのは哲学の裏付がしっかりしているからです。富士川游先生も最後は『医術と宗教』という名著を出されました。

「宗教なき教育は知恵のある悪魔を作る」とは名言です。私は池辺義教氏の『医の哲学』は三回精読しました。澤瀉久敬先生の『哲学と科学』は最も頻回読んで哲学を身につけて欲しいです。事実の羅列だけでは基礎がグラグラしているので説得力がありません。―このあと、禅と人生について長々と説かれているが省略―

先生は医家芸術クラブの創設以来の功績により芸術大賞をうけられ、また医学史研究により昭和五十七年十一月一日、日本医師会最高優功賞を受賞された。毎年二回は外遊して、フイレンツェは京都の街より詳しいほどであり、晩年は冬期一・二月の間はハワイに長期滞在しておられた。

先生は自ら予感されていた如く、この手紙を書いた十数日後に脳血管発作をおこされて、四年間の闘病生活ののち遂に十二月七日、永眠された。昨年六月一・二日の第九二回本会総会にご出席を願っていたが、それは実現できなかった。

先生の霊はいま何処にありや。恐らく先生のことだから天上に地上に或は東へ西へと気のむくままに羽をひろげて居られる事と思うが、今はただやすらかにお休み下さることをお祈り致します。

(京都市)